

第 3 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(第2回「北方領土と私たち」作文コンクール表彰式)

北方領土返還要求京都市民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

1	発刊にあたって	-----	1
2	実施要項	-----	2
3	選考について	-----	3
4	入賞者一覧	-----	4
5	授賞式風景	-----	6
6	受賞作文	-----	7

最優秀賞

京都府知事賞	京都府立園部高等学校	大森	しおり
京都市長賞	京都市立松尾中学校	杉浦	由佳理

優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立洛北高等学校附属中学校	井関	桃
京都市教育委員会教育長賞	京都市立北野中学校	秋山	皐妃
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立堀川高等学校	安川	愛佳
北方領土問題対策協会理事長賞	京丹波町立蒲生野中学校	出野	あずみ
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立嵯峨中学校	稲波	璃香
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	宮津市立日置中学校	畠山	一葉
京都新聞社賞	京都市立西京高等学校附属中学校	森	美樹子
京都新聞社賞	向日市立西ノ岡中学校	佐渡	春香
KBS京都賞	京都市立音羽中学校	林	紀絵
KBS京都賞	綾部市立豊里中学校	伊治	百香

佳作	京都市立堀川高等学校	若松	礼華
佳作	京都市立音羽中学校	仲	美咲
佳作	京都市立嵯峨中学校	山本	理沙
佳作	京都市立堀川高等学校	藤本	卓也
佳作	京都市立深草中学校	秋月	麻美
佳作	京都府立鳥羽高等学校	磯部	明日香
佳作	亀岡市立亀岡中学校	合田	温実
佳作	宮津市立養老中学校	谷川	咲希
佳作	舞鶴市立青葉中学校	久保	賢太郎
佳作	南丹市立八木中学校	中村	康太郎

発刊にあたって

平成二十年度は、京都の北方領土教育にとって、新たな前進を切り拓く一年となりました。

北方領土問題対策協会が、全国的な北方領土教育の研究開発をめざして策定した北方領土教育実践推進校に、京都市立八条中学校と京都府立園部高等学校が指定を受けました。この二校は、根室や大阪で開催された全国、近畿の教育関係者研修会で、北方領土教育推進上の全国的な先駆けの役割を果たしました。

また、本年度の北方四島教育関係者の訪問事業では、今年度から团长指名制が導入され、京都にその役割が期待され、この分野でも、全国のリーダーの役割を果たしました。

こうしたことを背景に取り組みしました第三回「北方領土と私たち」作文コンクールでも、昨年度を千点以上も上回る二千点近い応募をいただき、予想を超える成果をあげることができました。これは、北方領土教育が、その取り組みの深まりとともに、京都府内一円に共感と協働の輪が広がっていることの反映と喜んでおります。

平成十八年度に実施をいたしました第一回の作文コンクールの頃を振り返りますと、作文応募を要請した先々で「北方領土」の言葉に、多くの教育関係者が驚きと戸惑いを隠しませんでした。それが、このように多数の応募をいただける段階を迎え、この間わずか三年ではありますが隔世の感があります。

今回の応募作品を見てみましても、扱う題材や主題の広

がりとともに、その内容に一段と深まりが見られます。これは、それぞれの学校での多様な学習と、学び手の関心と理解の深まりによるものです。

このように、北方領土問題の学習が広がりをみせ、本文コンクールの定着が進みましたのは、各学校の御理解と御協力賜と心より感謝申し上げます。併せて、本作文コンクールに御後援をいただきました独立行政法人北方領土問題対策協会・京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会・京都新聞社・KBS京都をはじめとする関係機関の皆様方にも深く御礼申し上げます。

今回团长の要請を受け、訪問をいたしました国後島では、島の開発が進み不法占拠を固定化する動きに苛立ちと腹立たしさを感じましたが、それにもまして驚いたことは、島の青少年の「北方四島は、ロシアのものである」と堂々と主張する姿が際だったことです。翻って、日本の青少年の状況をみると、次代を担う日本の青少年の北方領土問題への認識と関心を高める北方領土教育の重要性と緊急性を再確認する訪問となりました。その意味において、この作文コンクールに期待される役割も重要性が増しております。今後とも関係の皆様方の御指導と御支援をお願い申し上げます。発刊の言葉といたします。

平成二十一年二月七日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 栗田 澄子

京都府北方領土教育者会議

会長 松本 和久

第3回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

1 趣 旨

京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

3 後 援 京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
(独立行政法人) 北方領土問題対策協会・京都新聞社・KBS京都

3 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること (題名は自由)

4 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成20年12月1日 (月)
(3) 作品規定 原稿用紙 (400字詰) 3枚以内
(4) 応募先 「北方領土と私たち」作文コンクール事務局

5 審 査 主催者において選定した審査員により審査

6 表 彰 (1) 賞の設定

最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点

優 秀 賞 6点・京都府教育委員会教育長賞 1点

・京都市教育委員会教育長賞 1点

・北方領土問題対策協会理事長賞 2点

・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点

・京都新聞社賞 2点

・KBS京都賞 2点

佳作・入選 若干点

第3回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

1 応募の状況

応募点数	1938点	(中学校 1541点	高等学校 397点)
応募校数	33校	(中学校 28校	高等学校 5校)
※ 第2回の応募状況		895点	25校

2 選考委員会の開催と選考基準

(1) 選考委員会

- ・日 時 平成21年1月7日(水) 午後3時～
- ・会 場 「京都府庁西別館」

(2) 選考委員会の構成

氏 名	所 属 ・ 役 職
栗 田 澄 子	北方領土返還要求京都府民会議会長
能 登 英 夫	北方領土返還要求京都府民議事務局長
西 村 英 二	北方領土返還要求京都府民議事務局次長
中 西 和 之	北方領土返還要求京都府民議幹事 (京都府埋蔵文化財調査研究センター常務理事)
雨 宮 章	京都府広報課長
矢 田 部 衛	京都市総合企画局政策調整課担当係長
松 本 和 久	京都府北方領土教育者会議会長 (京都府南丹教育局局次長)
島 本 由 紀	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市教育委員会首席指導主事)
小 森 誠	京都府北方領土教育者議事務局長 (京丹波町立蒲生野中学校教頭)
奥 村 光太郎	京都府北方領土教育者議事務局次長 (京都市立栗陵中学校教諭)
高 垣 明 夫	京都府北方領土教育者議運営委員 (京都市総合教育センター指導主事)

(3) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、あるいは取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・3回目を迎え、昨年度に比べ1000点を超える応募があり、本コンクールが着実な広がりを見せることができた。これも、関係機関並びに各学校と先生の御理解と御協力のお陰であり、感謝をしたい。
- ・作文の内容をみると、各学校での授業や取組を反映し幅広い分野から北方領土問題を取り上げ、内容的にも深みのある作品が多くみられた。北方領土問題に対する理解の広がりや関心の高まりがうかがえる。
- ・本作文コンクールや北方領土教育実践推進校の取組が契機となり、学校における北方領土問題に関する授業や指導が着実に広がり、生徒への北方領土問題に対する啓発がなされたことの意義は大きいものがある。

第3回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
大森 しおり	京都府立園部高等学校	2年
最優秀賞（京都市長賞）		
杉浦 由佳理	京都市立松尾中学校	3年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
井関 桃	京都府立洛北高等学校附属中学校	2年
優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）		
秋山 皐妃	京都市立北野中学校	3年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
安川 愛佳	京都市立堀川高等学校	1年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
出野 あずみ	京丹波町立蒲生野中学校	2年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
稲波 璃香	京都市立嵯峨中学校	3年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
島山 一葉	宮津市立日置中学校	1年
優秀賞（京都新聞社賞）		
森 美樹子	京都市立西京高等学校附属中学校	3年
優秀賞（京都新聞社賞）		
佐渡 春香	向日市立西ノ岡中学校	1年
優秀賞（KBS京都賞）		
林 紀絵	京都市立音羽中学校	3年
優秀賞（KBS京都賞）		
伊治 百香	綾部市立豊里中学校	2年

第3回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校	学 年
佳 作	若 松 礼 華	京都市立堀川高等学校	1 年
	仲 美 咲	京都市立音羽中学校	3 年
	山 本 理 沙	京都市立嵯峨中学校	3 年
	藤 本 卓 也	京都市立堀川高等学校	1 年
	秋 月 麻 美	京都市立深草中学校	1 年
	磯 部 明 日 香	京都府立鳥羽高等学校	3 年
	合 田 温 実	亀岡市立亀岡中学校	2 年
	谷 川 咲 希	宮津市立養老中学校	3 年
	久 保 賢 太 郎	舞鶴市立青葉中学校	3 年
	中 村 康 太 郎	南丹市立八木中学校	2 年
入 選	磯 部 裕 美 子	京都市立藤森中学校	3 年
	花 田 里 佳	京都市立醍醐中学校	3 年
	小 川 紗 知 子	京都市立日吉ヶ丘高等学校	1 年
	竜 澤 愛	京都市立伏見中学校	1 年
	池 田 理 紗	京都府立洛北高等学校附属中学校	1 年
	近 澤 み ず き	南丹市立美山中学校	1 年
	塩 貝 亜 也	南丹市立殿田中学校	3 年
	木 南 僚 太	京丹波町立瑞穂中学校	1 年

最優秀賞などの表彰式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の表彰式
平成21年1月28日 京都府庁



山田啓二京都府知事、田原博明京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の表彰式
平成21年1月28日 京都市役所



門川大作京都市長、高桑三男京都市教育委員会教育長から賞状が授与されました。

入賞作品

最優秀賞 (京都府知事賞)

北方領土問題を和平的に解決する方法

京都府立園部高等学校 二年 大森 しており

第二次世界大戦の終了した昭和二十年八月、ソ連軍は南... 北方領土問題を知って、私の疑問を和平的に解決する方法

は「日本は返還を求めている」との立場、中国では日本領、... 北方領土問題にさほどの関心を持っていません。世界の国々は、北

最優秀賞（京都市長賞）

北方領土問題

京都市立松尾中学校
三年 杉浦 由佳理

北方領土問題とは、今のロシアであるソ連が第二次世界大戦末期、北方四島に侵攻し、さらに北方四島を一方的にソ連領に編入するなどして、ロシアとなった今もお、北方四島を不法に占拠し続けていることをいう。日本政府は日口間に真の友好関係を確立するという方針のもと、粘り強くロシア政府との領土返還交渉を行なっている。なぜ、ここまでするのかというと、もし北方領土が返還されれば、四島分の領土とともに、広大な二百海里経済水域も手に入るからである。

現在、北方領土が返還されない理由として、ロシアが半世紀以上実効支配していることや、ロシアがそれに応じる気配がないということが言われている。

しかし、本当の理由は日本人の諦めのよさにあるのではないかと私は考える。なぜなら、「ロシア人がそこに住んでいるのだから、どうせ北方領土は返ってこないのではないか」という日本人の意識が、返還運動の盛り上がりや妨げ、そして実際にその通りになってしまっているからである。さらに、実際の政治上や外交上の問題として北方領土問題の扱いが小さいという現実がある。例えば、この問題が選挙の争点になっていないというのを見ればすぐに分かることだ。

では、どうすれば北方領土は返還されるのか。私は次

のようなことを考えてみた。本当の友人とは、時には苦言を呈するものだという。お互いにとって好まざる言葉であっても、それを避けていては真の友好関係を築けないという意味だ。日本とロシアの関係もこれに似ている。互いに隣国として、友好関係を構築していかなければならないが、北方領土問題の解決なくして、真の友好関係はないものと思われる。この話題を持ち出せば、つまり苦言を呈せば、相手はおそらく気分を害するのであろう。しかし、それでも粘り強く言い続けなければならぬ。それが我が国のため、そしてロシアを諫めるためでもあるからだ。

日口両国は決して理解し合えないわけではない。例えば、一九九〇年にソビエト連邦サハリンで、コンスタンチン君という少年が、全身九割に及ぶ大やけどを負った話がある。彼は余命七〇時間と宣告されていたが、日本人の治療により、見事に回復したのである。当時、東西冷戦が続き、「鉄のカーテン」で隔てられていた日本とソ連が一人の少年のために一つになった瞬間であった。

このように、冷戦の中であっても互いに協力できるのだから、関係もより良好な今、「北方領土問題を真剣に取り組むべきだ」と私は考える。そして、北方領土が返還された時、日口両国による真の友好関係が築けるものと思っている。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

初めて知った本当の北方領土

京都府立洛北高等学校附属中学校
二年 井関 桃

先月、父がおみやげを買って出張から帰ってきました。おみやげが北海道のチョコレートだったので、どこへ行ってきたのか尋ねると、北方領土の見える根室市や羅臼町へ行ってきたとのこと。私が北方領土を初めて身近に感じた瞬間でした。

そこで、父に出張で見てきた北方領土のことを詳しく聞いてみることにしました。

現在、北方領土は「ビザなし交流」という形でしか行くことができないため、父も実際には北方領土に渡ったわけではなく、対岸の北海道から「見た」だけだそうです。そして、実際の北方領土に住んでいて、旧ソ連軍に追われて北海道に移住した「元島民」の方の話も聞いたと話してくれました。

戦争も終わったはずの頃、ソ連軍が攻めて来るという噂を聞いた大人の人たちが、毎晩集まって相談をしていたこと、ソ連軍が二人組でやってきて土足のまま家に上がり込み神棚を壊したこと、嵐の夜に船でこっそり北海道へ逃げたこと。父から伝え聞く話は、これまで私が知らなかったもう一つの戦争の悲劇でした。それは沖縄や広島・長崎と同じく、今でも忘れてはならない悲劇だと思います。

そしてこのような元島民の方々が、現在も北海道を中

心に八千人ほどおられて、故郷へ自由に帰ることができないのを待ち望んでおられるそうです。たまに帰ることができるとは、特別に許可された墓参ぐらいだけだそうです。そのつらさは、私には想像もできません。

全ては戦後の旧ソ連軍による不法占拠が原因です。しかし、それを今日まで解決できなかった日本の外交や、領土問題に無関心であり続けた多数の日本人にも責任がないとは言えないと思います。そして、初めて、しかも偶然に北方領土に関心を持つことになった私自身の責任は何なのか。これからも関心を持ち続けることなのか、友人に父から聞いた話を少しでも伝えてみることなのか、じっくりと考えていきたいと思えます。

昨年の7月には、北海道洞爺湖でサミットが開催され、ロシアの大統領が初めて北海道にやってきました。世界が注目する中、ロシアのメドヴェージェフ大統領と日本の福田首相が会談しました。

悲しい体験をされた元島民の方々も高齢化が進み、領土問題の解決に残された時間は決して多くはありません。これからの日本とロシアの交渉が進展してほしい、そのために自分がほんの少しでも役に立てたらと思います。

父が話の最後に言った言葉は

「日本人とロシア人がお互いに理解し合うこと、これが一番の近道だと思う。」でした。

今も時々、その言葉を思い出します。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

今、日本人として

京都市立北野中学校
三年 秋山 皐妃

どうでもいい。

これが北方領土に対する私の考えだった。領土問題などという小難しい話は考えるのも面倒だったし、そもそも島四つに執着する日本やロシアの考え方が理解できなかった。日本がくり返し「固有の領土」と表現することも偏った見方のように嫌だった。

先日、学校でその北方領土に関するビデオを観た。北方領土の歴史が主なテーマだった。古くから、北方領土には日本人の研究があり、開拓があり、「領土」としての確かな存在があった。時代が移り、外交やそれに伴う条約締結がさかんになってからもその地位は揺るぎないものだった。しかし、戦争が始まった。ソ連軍は約束を破り対日参戦、北方領土に侵攻し占領。住民たちは追い出された。そして戦後も占領は続き、現在に至っているのだ。ビデオの内容は、私が知っていたはずの北方領土問題とは大きくかけ離れていた。私は以前から、北方領土が「日本固有の領土」だということを疑っていた。日本はこれまで武力により多くの国を占領し、「領土」としてきた。そんな背景を考えれば信じられるはずがない。それでも主張を続ける日本を恥ずかしく、情けなく思っていた。

しかしそれは間違っていたようだ。「固有の領土」とは

歴史的根拠に基づいた紛れもない事実であった。ならば、その返還を求めることは決して恥ずべきことではない。私は考えてみた。今後、北方領土はどうあるべきなのだろう。

私は返還を求めたい。日本民族としての誇りを取り戻すためにも、一刻も早い日本とロシアの平和条約締結のためにも、双方一致、平和的で早急な解決が必要だ。

そのために我々は何をすべきか。まずは問題について「知る」ことだ。私のように誤解していたり、知らなかつたりする人は大勢いるはずだ。正しい「理解」は「意識」へとつながる。北方領土問題解決に必要なのは、人々の「声」である。皆が、日本人として北方領土への問題意識を持つて主張すれば、それは大きな力となる。「無関心」は最大の敵である。今、我々に求められているのは、自国の問題を「自らの問題」として受け入れる意識と、それに関連づけて世界を見わたす広い視野なのである。

貧困や環境破壊、戦争など多くの問題を抱え、国どうしの協力が不可欠な今日の国際社会の中で、領土の取り合いなど見苦しいという考えは拭いきれない。しかし、北方領土の返還を願い、それに尽力する人々の強い思いは本物である。その思いに触れ、自分にもう一度「北方領土とは」と問いかけてほしい。今後の北方領土の行く末を決めるのは我々なのだから。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

四島返還への第一歩

京都市立堀川高等学校

一年 安川 愛佳

北海道納沙布岬から、歯舞群島が見えます。手が届きそうなほど近くにあるのに、日本人は島へ自由に行き来することができません。国後島、色丹島、択捉島も同じです。その原因は、日本とロシアの北方領土問題です。

私は、中学生の時に北方領土問題について学習し、四島の歴史を知りました。ロシアが四島を不法占拠してから六十年以上がたった今も、島に日本人が住むことだけでなく、自由な行き来さえも許されていません。その中でも、日本はビザなし交流を始めとする様々な交流事業を行っていません。そのような取組を通して、島に住むロシア人と文化や習慣での交流を深め、共に四島で生活できる関係を築きたいと考えていました。

その私が、「択捉島ビザなし交流団」の一員として択捉島を訪れたのは、昨年の夏のことでした。島のロシア人は、私たちを笑顔で出迎え、訪問した家庭でも温かくもてなしてくれました。言葉が通じなくても、ゼスチャーを使って気持ちを伝えることができました。その反面、択捉島には兵士が隠れるための穴や、今でも使用できる戦車が、北海道に向けて配置されていたことも事実です。日本は話し合いによる平和的な問題解決を目指していません。日口間の問題解決に対する考え方の差を感じ、驚くとともに悲しみを覚えました。

その中で私は、北方領土問題の解決における目標と考えていた「共存共栄」を達成することの難しさと重さを感じました。現在、島ではかつての日本人と同じようにロシア人が平和な生活を送っています。そして、四島を故郷として愛しています。そのような人々を島から追い出すと、元島民の方々と同じ傷を負わせてしまいます。しかし、四島へ帰りたいと望んでいる日本人がいることも現実です。

私の周りには、北方領土の日や四島の名前を知らない人がたくさんいます。このように、日本中で北方領土問題に関心を持つている人は少ないと思います。この問題は、人類が抱える環境問題や身近な人権問題と比べると、接する機会が少なく、意識しないと時代とともに忘れ去られてしまうかもしれません。だからこそ、二十一世紀を担う私たちが正しい知識を持ち、日本固有の領土である北方領土の返還を、一丸となつて強く求め続けることが大切です。また、問題解決の土台としてお互いの主張や歴史を正しく理解し、平和的に解決されるように友好関係を築かなければなりません。

私は、択捉島を訪れ、島のロシア人の生活や温かい笑顔に触れたことで、日本人とロシア人の島での共生に可能性の兆しを見つけました。国や言葉は違っても、理解し合えるということを実感したからです。今回の経験で学んだことを少しでも多くの人に伝え、四島返還が一日も早く実現するよう強い信念を持ち、行動を起こしていこうと思います。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土について学んだこと

京丹波町立蒲生野中学校
二年 出野あずみ

「この北方四島は、自分たちの国だ。」

ビデオの中のロシア人は、いくつかの理由を踏まえてそう主張していました。これは、先生に北方領土についてのビデオを見せていただいた時のことです。

この学習をおして、まず日本人と、北方領土に住んでいるロシア人の意見が大きく違っていることが分かりました。日本人の意見は「もともと北方領土は日本の国土の一部だったのだから、早く返してほしい。」というものです。これに対しロシア人は、もうずいぶん長い間そこに住んでいるのだから、住み慣れたその土地は自分たちのものだという意見です。その意見もよくわかりますが、大切な故郷を奪われた元島民の立場から考えてみると、とても迷惑な話です。

さらに驚いたことは、島のロシアの子どもたちは、この北方領土問題を知らないと言っていることです。ロシア人は、完全に北方領土は私たちのものだから、領土問題など自分たちには関係がないと言う考えをしているようです。そして子どもたちには教える必要がなく、子どもたちはこの事実を知らないでいるのです。私は、この考えには納得がいきません。前にも言いましたが、住み慣れた土地を自分たちの土地だと言いたい気持ちにはよく分かりません。しかし、それならきちんと理解し合えるまで話し合

うのが、解決につながる本当の道だと思います。それを、事実を次の世代に伝えず忘れ去られたらいいというような考えは卑怯だと思います。

このように、今回は北方領土について多くのことを知ることができました。また、そのことが北方領土について興味を持つて考えるよいきっかけになりました。

しかし、今までロシア人に対する意見を言ってきましたが、日本側にも意見があります。それは、まだまだ日本国民の北方領土問題に対する知識や意識が足りていないと言ったことです。北方領土問題は日本全体の問題です。たとえ、それと直接関係がなくても、同じ日本人として一緒に考えていくべきです。

これまでの私は、今まで北方領土のことを少し耳にしたことはあったけれど、あまり深く考えることも知ることもありませんでした。しかし今回の北方領土についての学習を通して、お互いの国の課題点などが分かりました。そして、私たちが北方領土の事実を知ることが解決への第一歩だと思うので、これからもそのことを意識して、少しでも解決に近づけるよう自分なりに学習していきたいと思えます。

そして何よりも私は、北方領土問題の解決はロシアと日本がお互いの事情を理解し合って歩み寄ることが大切だと思えます。そしてそうすることが両国の平和で友好的な交流を一層深めることにつながると信じています。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

友好を深めるために

京都市立嵯峨中学校
三年 稲波 璃香

私は、ロシアからの北方領土の返還を望みます。

北方四島には、多くの美しい自然があることを知りました。本土では見られない鳥などの多くの生き物、珍しい植物などがあり、写真で見ただけでも、とてもきれいでした。

それらの美しい自然を自分の故郷の思い出として残している、以前に北方領土に住んでいた人々は多いと思います。ロシアから退去を強いられてから、今まで一度も故郷を忘れたことがない人が殆どだと思います。さらに、同じ地で住んでいた友人と離れていくことは悲しかったと思います。

私は、生まれてからずっとこの地にいます。春には桜が満開になり、秋には山々の紅葉がとても美しいところ です。夏には水が澄んでいる川、冬には雪で少し白くなる山は他の季節に劣らないくらいきれいです。世界中から毎年多くの人々が来られ、とても誇らしく思います。そして、多くの思い出もあります。この地でできた友達もいます。中学校に上がるとき、離れてしまった友達 のことは、今でもよく思い出します。

だから、強制的に退去させられた元島民の人々の悲しみは、とても深く、とても大きいものだと思います。しかも簡単には訪れることができないと知り、強く返還

が求められている理由が分かりました。私は、今よりもっとこの問題の和解のための取組が進んでほしいと思いました。

中でも「ビザなし交流」などの和解のための雰囲気づくりは、とても良いことだと思います。ホームステイなどの取組も行なわれているそうで、そういう動きがもっと増えれば、平和的に解決できるのではないかと思います。

そして、「もう一つ大切なことがある」と考えました。それは、国民の「北方領土を返してほしい！」という声をロシア側に届けることです。日本の人々や元島民の願いを形にしてロシアに見せなければならぬと思います。そうすればきっと、話し合いはさらに進展すると思います。

とにかく私は、日本と元々住んでいた人達に北方四島を返還してほしいと思います。そして、自然や友人、思い出も一緒に返してあげてほしいと思います。

また、この問題が解決することによって、今以上に、「ロシアと日本の友好が深まればいいなあ」とも思います。両国が納得できるように問題が解決され、平和な関係が保たれていってほしいものです。そのために、私は北方四島の返還のための運動に、協力していきたいと思っ

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

みんなが笑顔になるために

宮津市立日置中学校
一年 島山 一葉

「北方領土」。そう聞けば私は、「北海道の近くの島々」「領土問題」といったことを思い浮かべます。しかし、知っているのはその程度のことです、詳しいところまでは知りませんでした。「日本が抱えている問題なのに、日本人の私が知らないなんておかしい。情けない。」

最近になって、やっとそう思うようになりました。

でも、この問題についてあまり知らないのは、私だけではないだろうと思います。学校で話を聞いたとしてもすぐ忘れてしまったり、あまり重く受け止めていない人が多いのではないのでしょうか。「わかっている。」と思っている人も本当のことを知っているのでしょうか。そう考えていくと「このままでいいのかな？」と思うようになりしました。

気になった私は、北方領土問題について調べることになりました。自分で調べたり社会科の授業を受けたりしていくつかのことがわかりました。一つは、昔住んでいた日本人は島を追われ、代わりにロシアの人が住んでいるということ。終戦後島を追われた人々はまだ島に帰ることができていないということ。彼らが島を返してほしいと願うのは当たり前です。しかし、今島にはしあわせな暮らしをしているロシアの人々がたくさんいます。彼らを追いつけばきつとつらい思いをさせることになるでし

よう。それではみんなが納得することはできないと思いました。

「どうすれば北方領土問題を解決することができるのか。」私なりに考えてみました。考えれば考えるほどわからなくなってしまう。やっぱり難しい問題です。調べていても人によって意見がバラバラだし、歴史を調べてみてもハッキリとした事実はわかりません。北方領土の歴史について日本の主張とロシアの主張とは全く違うので、調べていてもどちらを信じればいいのか迷いました。なかなか見極められません。

それでは、今私たちはどうすればいいのでしょうか。まず北方領土について本当のことを知らなければいけないと思えました。国民の一人一人が島の歴史や現状などを知り、「自分たちの問題」だと思えることです。そして、ロシアの人々の意見を聞くことも大切だと思います。自分たちの意見を押しつけるだけでなく、今島に住んでいる人やその他たくさんの方の意見を受け止め、誰もが笑顔になれる解決策を作ってほしいと思います。それはむずかしいことだと思うけれど、この問題を早く解決してつらい思いをする人をなくさなければいけないと思います。

まずは、私たち国民一人一人が、事実を知らなければなりません。そして歴史や人々の意見をわかった上で、リーダーの人には相談や話し合いをすすめてほしいと思います。

でも私は何よりもこの問題でつらい思いをしている人の話をちゃんと聞いてほしいと思います。そしていつかロシアの人でも日本の人もみんなが幸せになれるようにと願います。

優秀賞（京都新聞社賞）

熱意が救う日本の誇り

京都市立西京高等学校附属中学校

三年 森 美樹子

北方領土問題―これは日本が昔から長く抱えてきた問題である。私達本州に住む人間にとつては直接生活に関わりを持たない問題であるが、今回改めてこの北方領土問題について学習し、私は日本はこれからどうするべきなのか、そして日本に住む我々国民はどう考え行動すべきなのか考えさせられた。

そもそも北方領土が日本の領土であると主張しなければならぬのはなぜだろうか。そこには様々な問題がある。まず一つは経済水域の問題がある。北方領土が日本の領土と認められれば日本の経済水域は拡大し、水産資源の量もふえることになる。これは日本にとつてかなり有益だと言えよう。そう、有益―実際にこの利益を巡つての事件が起きた。一昨年の夏、ロシアが主張する領海内で漁をしていたとして、ロシア側が発砲し日本人一人が死亡したという事件である。国と国とが利潤を巡って対立し合う結果、一人の人間が命を奪われてしまうというのはあまりに無惨であると私は思った。また、もう一つの問題は元々北方領土に住んでいた人々が他へ移り住

まざるを得なくなつたことである。現在はその子孫が墓参りなどのために島々を訪れることがあるが、それは最近のことで少し前までは旅券なしでの訪問は許されなかつたそうだ。日本政府はその人々のためにも日ロ関係をより平和で友好的なものへと築き、北方領土の返還を提唱し続けなければならないのである。

これまで日本は数回にわたつて四島返還の交渉をしてきた。しかし、今に至つても一向に良い兆しは見えて来ていない。しかし私はこれからも日本が返還を諦めずに訴え続けることを望んでいる。利害関係のことももちろんあるがやはり一番は元島民の人々の気持ち、そして日本としての誇りを大切にし、日本とロシアの関係が今以上に改善されて欲しいと願っているからである。そのためにも日本政府は今以上の努力が必要になるだろう。外交関係は政治上非常に難しい分野であると思うが、新しい声明文を作成したり、日本人、ロシア人の交流を深めるためのイベントなどを行つたりして少しでも前進するために努めてほしいと思う。強い関心・熱意が事を動かす引きがねとなるかもしれない。

優秀賞（京都新聞社賞）

領土問題解決と平和への祈り

向日市立西ノ岡中学校
一年 佐渡 春香

私は今まで「北方領土」という言葉を聞いたことはありませんでしたが、実際に考えてみたり行動したことはありませんでした。自分にはあまり関係がないし、別に自分の生活に影響を与えることもない、どうでもいいと思っていたのです。

しかし、授業や新聞などでも取り上げられ、調べ学習をしていくうちに「北方領土」に関心がわいてきました。同時に北方領土を占領したソ連軍に対して怒りの気持ちもわいてきました。

1945年9月2日、ソ連は当時まだ有効だった日ソ中立条約を一方的に破棄し、終戦間近の北方四島に侵攻してきたのです。私は当時のソ連軍の気持ちに全く理解できません。

日本は周りを海に囲まれた島国です。小さきままな島は合わせて四千もあり、国境などを確定するのに難しい点もあるでしょう。けれど、北方領土は違います。北方四島は古くから日本固有の領土であり、いくら戦争に勝ったからと言っても他国を占領するなど許されるはずもありません。

しかし、今の北方領土のことを考えてみると、そこにはロシア人が住み平和な暮らしを送っています。元島民の方達には早く自分の故郷に帰りたいたいと思っておられる

方が多いと思います。でもロシアの人たちも日本を占領するために住んでいるわけではないのです。もし島のロシア人を追い出して日本人が戻ってきたとしても、それは六十年前、ソ連が日本にしたことをそのまま繰り返しているだけです。

私は、この問題にきちんと取り組まなければならないと思います。そのためにはお互いが理解すること、すなわち「人を思いやること」が必要になってくるのではないのでしょうか。領土問題は国同士だけの問題ではありません。私たちの周りでも普通に起こる事です。いじめや仲間はずれでもこの事が言えると思います。自分の考えだけを主張してはいけません。お互いの考えを分かり合うためにも、人と分かり合える、思いやる気持ちが大切なのです。北方領土問題も、利益や土地ほしさに奪いあうより、人同士の交流を深め理解し合つての話し合いが大切です。現に、北方四島と日本との交流は続いています。そこには人種や国というラインは関係なく本当に心を通わせられている姿が見られます。

日本とロシアが協力して共存するためには、一人一人の思いやりが必要です。互いにいがみ合い、憎みあうよりも笑顔でいたいと誰もが思っているはずです。北方領土問題の解決のために、一人一人がお互いを尊重し、思いやりの気持ちを持ちましょう。そうすることで、本当の平和が生まれることを願います。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土問題

京都市立音羽中学校
三年 林 紀絵

北方領土の島々は、江戸時代から日本人が一生懸命に開拓して、それ以来ずっと住み続けてきたところなのに、いま日本人がそこで暮らしていないのは変だなあと思っていました。第二次世界大戦が終わってすぐの頃、当時のソ連がルールを守らないで力づくで北方領土の島々を占領してしまったということを小学生のときに知りました。そのころにお父さんから北方領土の話をしすこし聞いていたので、北方領土のことを何となく調べたりもしていました。

始めに私が疑問に思ったのは、第二次世界大戦が終わってもう長い時間が経っているのに、なぜロシアの占領が未だに続いているのかということです。日本の領土なのに、返してもらっていないということはおかしいと思うし、早く返してくれたらいいのと思いました。

けれど、今日北方領土のビデオを見たり、先生の話を聞いて、北方領土が返されることは簡単じゃないと分かりました。北方領土が返されるということは、もともと日本のものだったのだからすごく良いことだと思っていました。よく考えてみると、今そこに住んでいるロシア人はすごく困るし、問題もたくさんあると思います。だから、今すぐ北方領土を返してもらうことはできない

かもしれない。でも、その前にも出来ることはたくさんあると思います。

そのうちの一つに、北方領土に住むロシア人のことをもっとよく知る必要があるということが挙げられると思います。そこで私が思ったのは、北方領土で暮らすロシア人と仲良くすることはできないのかということです。最近、もともと島で暮らしていた人々や、北方領土返還のために運動をしている人などを対象に、「北方四島交流」というロシアの人たちとスポーツや家庭訪問などの楽しい交流ができるようになりました。その交流を通して、ロシア人も北方領土が本当は日本のものだというのを少しずつ理解していつているようです。ただ、そのような交流を私たちが北方領土に行つてすることはできません。日本人とロシア人がもつと交流しやすくなることで北方領土問題の解決にもつながるだろうと思います。

北方領土を返してもらうためには、もちろん日本とロシアがたくさん話し合わなければなりません。その話し合いが良い方向に進むためにも、日本人とロシア人がもつと仲良くなる必要があると思います。

最終的に、北方領土は日本に返還されなければならぬでしょう。でも私は、北方領土の返還が目的じゃなくても北方領土と日本の間がだれでも行き来できるようになってほしいです。それで、北方領土にロシア人だけでなく日本人も住めるようになって、両国間の交流がもつと深まればいいと思います。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土

綾部市立豊里中学校
二年 伊治 百香

「北方領土」という言葉は、聞いたことはあつたけど今まで詳しくは知りませんでした。しかし、ビデオなどを見てそこにもともと住んでいた人たちの苦勞などが、少しはわかつたような気がします。

第二次世界大戦が終了した直後、北方四島はロシア軍によって不法占拠されました。そして今もなお、北方四島は占領下にあります。そこにもともと住んでいた人たちは、生まれ育った故郷を強制的に離れることになりました。それはやつぱりおかしいと思います。好きな時に故郷に行けず、不便なことも多いと思います。例えば、お墓参りをすることもできないし、思い出の場所で思い出に浸り、懐かしむこともできない。不便で、悲しくて、悔しいと思います。「不法」なのだからロシアに早期返還を求めることは当然です。けどそんなに簡単に解決できる問題ではないと思います。そこにはロシアの人が住んでいて、その中には事情を知らない子どもも多く含まれています。もし日本人がそこに住み、ロシア人がロシアに帰ることになったとしたら、同じように故郷へ帰れないことになります。もちろん罪もない子ども達も。でもだからと言ってこのままではいいとは思いません。やつぱり最終的には返還してもらって「ここは日本の領土だ」

と胸を張って言えるようになることに意味があると思います。

1998年11月、モスクワ宣言において、元島民・家族に自由訪問を実施することが原則的に合意されました。これは北方領土返還への第一歩だと思えます。ですが、元島民とその家族は、現在住んでいるロシア人に迎えられる形でした。歓迎されると言うことはとてもよいことだと思ふけれど、どこか複雑な気持ちになりました。また自由訪問は、そう回数が多くないと思うので、もう少し増やすべきだと思います。それは回数が多い方が気持ちに余裕が出てくると思うからです。それに本来なら数限りなく自由にいけるところだと思ふからです。

この「北方領土問題」の解決は非常に難しいことだと思いますが、必ず解決しなければならぬことでもあります。1945年にロシアに占領されてから、長い年月がたちました。そして私たちの想像を超えるほど長い間に、故郷のために多くの人たちが活動を続けられました。今、自由訪問が実施されているのも、それらの活動の成果です。早期返還には両国の理解が必要です。この問題について国民一人一人が他人事だと思わずに理解しようとするのが大切だと思います。ロシア国民にも理解してもらった上で、返還してもらおうことが大切です。両国民が理解・納得すると言うことはこの先関係を築いていく上で必要不可欠なことです。「早期返還」されるといいなあと思います。

佳作

北方領土に「共存の地」を

京都市立堀川高等学校
一年 若松 礼華

日露間における「北方領土問題」は国益だけではなく、第二次世界大戦後に強制送還された日本人の人権にも関わる問題である。しかし、これほど重要な問題でありながら、国民の関心は薄い。実際、私自身も今回調べてみるまで、北方領土についての知識も関心も薄かった。しかし、調べていくにつれ、複雑な歴史的背景があり、かつ現在の島民の状況が芳しくないことが分かり、どうすれば両国にとってもよい結果となるのか、真剣に考えるようになった。

まず、私が考えたことは「とにかく過去を気にしてばかりではいけない」ということだった。というのも、現在の争点になっているのは、ヤルタ協定とサンフランシスコ平和条約で、私はこれらのどちらも効力を発揮しないと考えるからだ。ヤルタ協定に関しては、日本政府と同じく「秘密協定であるので、日本は拘束されない」という考えだ。またサンフランシスコ平和条約においても、日本政府は「千島列島を放棄する」としているが、千島列島に北方四島は含まれない上に、肝心のソ連が条約に調印していないとなると、日露和親条約、千島樺太交換条約、ポーツマス条約にまで遡ることになる。すると、結果的にみても一貫して日本の領土ということになる。が、しかし、過去の条約をあげつらうことだけでこ

の問題は解決するのだろうか。私はそれは大きな間違いだと思う。なぜなら、今現地に住んでいる人々を無視することなど出来ないからである。これが先ほど述べた「過去ばかり気にしてはいけない」という真意である。現在、北方四島に住んでいるのは旧ソ連の人々のみである。第二次世界大戦後の強制送還以降、日本人は住むことを許されていないのである。では、その現島民たちはこの「北方領土問題」をどう思っているのだろうか。調べてみた結果、いくつかの調査結果から、意外にも、四島の日本への返還に反対する人より賛成派の方が多いということが分かった。原因として、北方四島がモスクワから離れているため運搬に費用がかかり、物価がロシア内で一番高くなってしまったことや政府からの支援がソ連崩壊により途絶えてしまったことなどがある。こうした実態からも、やはり日本に返還されるのが一番適当であるといえよう。しかし返還後、様々な補償金問題が浮上してくることは必至である。その際にどのような対応をとるのか、きちんと考えていく必要がある。

過去に日本とロシアは日露通好条約で樺太を「両国民雑居の地」としたことがある。近年旧島民の日本人がビザなし渡航をし、現島民と交流を深めていることから、返還後には日本の領土でありながら島民のほとんどがロシア系という二つの国の人々の共存の地となる可能性がある。以前は達成できなかった「共存」を、過去の失敗をもとに対話を深め成し遂げてほしいと思う。

佳作

北方領土と人々の努力

京都市立音羽中学校
三年 仲 美咲

現在、日本はロシアとの間に「北方領土」という問題を抱えている。これは第二次世界大戦後から抱えている問題だが、いまだに解決されていない。

「北方領土」とは、北海道のすぐ近くにある、国後島、色丹島、歯舞群島、択捉島の4つの島のことである。これらの島は、昔から日本固有の領土だということが日本の歴史上証明されている。「北方領土」は第二次世界大戦後にソ連が占領するまで、ロシア人が住んでいたことはない。それまでは、アイヌ民族や日本人のみが定住していた。

それにもかかわらず、当時のソ連は日本との約束を破り、島を占拠した。これはどう考えてもおかしいと思う。いきなり占領して、それからまるで自分のもののように、住んでいた人達を追い出して住み始めるなんて、勝手すぎると思う。そのせいで、大勢の島民の人々が自分の故郷へ帰れなくなったのだから。そこに住んでいた島民の数は約九千九百人だという。その大勢の人々が故郷で生活することもできないし、自分の先祖のお墓参りに行く

ことも許されない。私がこの立場に立たされたら、自分の生まれた所で暮らすこともできないなんて悲しいと思う。元島民の人達もきつとそんな気持ちだろうから、早くその人達の故郷が返ってきてほしいと思う。

それを実現するために、今まで多くの人が努力してきた。条約を結んだり、各地で返還運動を行ってきた。しかしまだ「北方領土」は返ってきてはいない。なぜこれほどの努力があるのに、こんなに時間がかかるのだろうと思っただけで、それでもあきらめず活動を続ける人達はすごいと思う。その活動のおかげで、現在ロシアと日本は交流を深められている。両国の間では、まだ平和友好条約が結ばれていないので、いつの日か条約が結ばれ、「北方領土問題」も解決してほしいと思った。

その日を近づけるためにも、より多くの協力が必要だと思う。何ができるかはわからないが、世界にはこういう問題があると知っておけば、署名活動を見た時に、署名をすることもできるだろう。現状を知ることには、自分ができることを考えることにもつながるし、その気持ちで困っている人を救うことにもつながるのではないだろうか。

佳作

北方領土を「友好の掛け橋」に

京都市立嵯峨中学校
三年 山本 理沙

今年の夏、私は初めて北方四島の一つ、国後島を見た。「見た」と言っても、家族旅行で北海道の羅臼を訪れたとき、海沿いの道路から、沖合にうつすらと見えただけである。しかし、私は現在「外国に占拠された地」となつてしまつてゐる土地が、意外と近くにあることに驚いた。このとき、北方領土は私達にとつて、遠いようで近い存在なんだと改めて実感した。

北方領土問題とは、北方四島と呼ばれる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島が、一度も外国の領土になつたことがない日本の固有の領土であるにもかかわらず、六十年以上にわたつてロシアに不法占拠されている問題である。また、この問題により、当時北方領土に住んでいた約一万七千人の日本人は強制退去させられ、現在も自由に故郷へ帰ることができない状態だといふ。

北方領土は、ヒグマ、キツネ、イタチやゴマフアザラシ、トド、クジラ、イルカなどが生息し、とても自然が豊かな土地だそう。また、その付近の海は、日本海流と千島海流がぶつかる潮目の位置に当たり、水産資源も

豊富であるといふ。そんな条件の良い土地だからこそ、日本もロシアも譲れないのだから。しかし、現在、北方領土問題の影響を最も強く受けているのは、日本の政治でもロシアの政治でもなく、元島民の方々だと思ふ。長い間暮らしていた土地から追い出され、その後、家族の墓へのお参りさえも自由に行けない。その方々を思うと、一刻も早く問題を解決するべきではないだろうか。

だからと言つて、無理矢理占領したりすることは許されない。現在はロシアの人々が暮らしている。その人々を追い出すようなことは決してあつてはならないことだと思ふ。なぜなら、昔、ロシアが日本にしたことを仕返すこととなり、ますますロシアとの関係が悪くなつてしまふからである。

そこで私は、日本とロシアとの関係を保つためにも、北方領土を共有してはどうかと考えた。それなら、日本の元島民も、ロシアの現島民も北方領土に住むことができ、更に、北方領土をきっかけにロシアと交流を深めることができるのではないだろうか。

北方領土は、日本にとつてもロシアにとつても身近な存在である。少しでも早く、日本とロシアの「争いの原因」ではなく、「友好の掛け橋」として有効に利用するべきだと思ふ。

佳作

領土問題を解決するために

京都市立堀川高等学校
一年 藤本 卓也

ロシアが占領している北方領土は資源などで重要な島である。日本は、長年この島を返還するように求めているが、ロシアに返還する意志はあまりないようだ。この問題を解決することは後回しにされている。もう、誰も日本とロシアの政治家による話し合いに期待してはいないだろう。ここは、第三者を交えた話し合いをするべきだ。その第三者は、国際司法裁判所がいいのではないか。国際司法裁判所に訴えるべきだと考える理由は三つある。

一つ目は二国間の話し合いによる解決に期待できないからだ。この問題は何十年も前から続いているもの、全く進展は見られない。唯一合意したのは「日ロ間に領土問題は存在する。」これだけだ。そんなことは誰もが分かっていることだし、確認するまでもないことではないか。

二つ目は時間の問題だ。「時間をかけて解決する」というが、何十年も前から問題なのに、未だ解決できてないというのは、いくらなんでもかかりすぎだ。この調子だと、後、何十年で解決するのだろうか。全然進展が見られない二国間の協議に期待はできない。その点、裁判では意見が食い違っても必ず判決がくだる。時間が多少かかるかもしれないが、何十年もかかることはないに違

いない。

三つ目は日本の主張とロシアの主張に大きな隔たりがあることだ。日本はロシアの主張に反論しているが、ロシアはこれに応じていないので、両国間で平行線をたどってしまっている。日本は千島列島の範囲やソ連の条約の不参加について主張しているにも関わらず、ロシアは千島列島がロシアに属していると主張する。これは反論になっていない。仮に千島列島がロシアの領地だとしても、争点は千島列島の範囲であり、これに対する反論ではない。また、ロシアの情勢で北方領土の問題に対する優先順位が二の次になっていることも大きい。経済危機やチェチェン紛争によって北方領土問題がうやむやになってしまったからだ。その後も進展がみられないのはロシアの態度が積極的でないからだ。四島を二島に分けて返還する意見も出ているが、普通は四島丸ごと日本に返還するべきではないか。

ロシアはこの問題から逃げているとしか思えない。国際司法裁判所に訴えるには二国間の同意が必要である。なのでロシアを同意させることも重要である。一刻も早くこの問題が解決することを願う。

佳作

北方領土について

京都市立深草中学校

一年 秋月 麻美

今回、北方領土のことを勉強しました。

以前から北方領土の択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島という名前だけは知っていました。あんまり勉強していなかったし、詳しくは全然知りませんでした。でも、今回ビデオを見て、北方領土の歴史などたくさんのことを学ぶことが出来ました。

今では、日本人は住んでいなくて、ロシア人が約一万六千人住んでいます。ですが、昔は日本人が住んでいました。一九四五年には一万七二九一人の方が住んでいたの：：。現在、元島民の方は全体で約九九〇〇人で、そのうちの約七六八一人の方は北海道に住み、残りの方は全国に散らばっています。私はそれを聞いて、正直驚きました。ずっと住んでいた故郷にいられないなんて：：こんな悲しいことはないと思います。ロシアはなんてひどい国なんだろうとも思いました。

北方領土にはたくさん自然があります。魚、花、動物など多くの自然があつて、日本中探してもこれほど自然のある場所には行つたことがないので、一度見に行き

たいです。

ロシアは日本と何回も条約を結んでいます。私が知っている範囲では、確か五つの条約を結んでいます。北方領土は戻ってきていません。サンフランシスコ平和条約が有名ですが、実は日ソ共同宣言や東京宣言などもあり、計五つくらいの条約を結んでいるわけです。

最近の日本では、ある取り組みがされています。それは、北方領土に住んでいるロシアの人々を北海道に招いて、交流するというものです。日本からは、そばの作り方などの食文化など、たくさん文化を伝えていきます。ロシアからは踊りなどの独特な文化を教えてもらっています。これからもこういった活動は続いてほしいし、もつと他にも色々な国の人達と交流していけたらいいと思います。

日本の領土をこのまま占領されるのはイヤなので、一刻も早く返してほしいです。交流などいっぱいして親睦を深め、北方領土が返ってくるというのが望ましいです。私も小さなことでもいいからやってみて、一日も早く戻ってくるように協力していきたいと思っています。

佳作

私なりの解決案

京都府立鳥羽高等学校
三年 磯部 明日香

私が今回、この「北方領土問題」を学んでいて一番不思議に思う点は、日本政府の対応です。日本政府は、なぜ国会の中だけで全てを決めてしまおうとするのか不思議です。確かに国会の中や議員同士で話し合うのも大切なこと。しかし私たちの耳にまで届かなければ、世間から忘れ去られていく一方だと思えます。世間から忘れ去られていくことになると思います。実際、日本と各国のトップが話し合う時でもこの「北方領土問題」はほとんど話される機会がないようです。その場で言ってもすぐには進展しないかもしれないけれど、そこで一言言うことで「その問題もあるなあ」と少しでもアピールができるかもしれない。日本という国が得意な「ねばり強く」という精神に $\pm\alpha$ して「あともう一步」の精神も入れてもらいたいと思いました。

次はメディア関連のことです。私は毎日少しでもテレビのニュースを見るようにしています。ですが、「北方領土問題」を取り上げた特集やドキュメントはあまり見たことがありません。先ほど述べたように、日本政府があまり動かないのでメディアもそんなに反応しないのかもしれない。でも「日本にはまだこんな問題が残されている。」と言うことをみんなが最もよく活用して接す

る機会の多いテレビでやるべきだと思います。そのような番組が少しでも増えれば、世間の人々の反応もよくなり、日本政府も「北方領土問題」について今よりもっといろいろな面で動きやすくなると思います。そうなることを私もこのままの体制ではまずい、と少しでも危機感を持つようになると思います。

私がこの作文を書いて強く思ったことは、「北方領土問題」という問題がまだ日本にはある。」と言うことを日本の中や世界の国々に覚えておいてもらうことだと思います。それは簡単なようで難しいことかもしれませんが、その小さな努力を積み上げることによって、この先状況が変わることがあると私は信じています。私は今、高校三年生です。受験勉強も一日だけやっても何の力にもなりません。北方領土問題を受験勉強と一緒にしたら叱られるかもしれませんが、北方領土問題も解決までまだ時間がかかると思うので、少しずつ少しずつ交渉を進めていってほしいと思います。

私も大学合格に向けて毎日毎日受験勉強を続けていきたいと思えます。
「ちりも積もれば山となる」

佳作

北方問題を知る

亀岡市立亀岡中学校
二年 合田 温実

北方領土問題と聞いて、くわしく説明できる人は少ないのではないだろうか。実際に私たちの周りでは私も含めて詳しく知りませんでした。そこで私は少しでも北方領土問題について調べようと数冊の本を読みました。

その中でも特に気になったことがあります。それはロシアの人々が北方四島に移住した時期と動機です。

時期と動機は主に三つに分けられています。その中でも、一番初めに移住してきた人々は戦争により住居をなくし、身一つで島へやってきたのだと言います。先住の日本人達はその人達を助け、数年の間は生活を共にしていました。ですから、一番初めに北方四島に移り住んだこの人達の中では、日本を毛嫌いしたり、まして悪意を持っていてるなんていう人はごくわずかでしょう。

しかし、それ以降に移住してきた人々はどうでしょう。日本は戦争の相手国ですから、当然あまりよいイメージは持ちません。または、北方四島を昔日本が開拓し日本人が住んでいた日本固有の領土だと知らない人がいるかもしれません。

このように同じ北方領土に暮らしている人々でも、日本に対しての思いはさまざまなのです。そこで、私は思いました。北方領土問題についての認識を一致させるこ

とが大切なのではないかと。けれどそれはとても難しいことです。しかし難しいからと言って放置しては何か始まりません。何か一つ小さな事でよいから始める、そしてだんだんと知っていくということが大切だと思います。

また返還を求めるばかりでなく、少しは北方四島に住んでいる人々のことを考えてみてはどうでしょう。北方四島が日本に返還されてしまうと、現在居住している人々は島を追い出されるわけです。これでは、住民があまりにも気の毒です。それにいつかのロシアが日本にした事に似ていませんか。故郷を取り上げ人々に悲しみや怒りを与えるわけですから。

ですから、私は日本人とロシア人がともに北方四島に住むことができないのかと考えます。とても難しいことです。反対意見も多くあるでしょう。無理難題と言われるて終わるかもしれません。しかしこういう意見もあるのだなど知ってほしいのです。北方領土問題の歴史や現在の状況、解決策や問題点、さまざまなことを一つでも二つでもよいから知ることが大切だと思います。知ることが考えられることもいろいろ出てくるでしょう。みんなで考えればよい案が浮かぶかもしれません。

ある人が「一番怖いのは無関心だ。」と言っていました。本当にそうだと思います。知ることがスタートです。ですから私はたくさんの方がスタート地点に立ち、前へ踏み出してくれることを願っています。そしていつか、最善の方法で北方領土問題が解決すると信じています。

佳作

北方領土について

宮津市立養老中学校
三年 谷川 咲希

日本が抱えている問題に「北方領土問題」があります。北方領土問題は択捉島・国後島・色丹島・歯舞諸島の四島をめぐり、日本とロシアとの間で続いている問題です。

そもそも北方領土問題はどうして起こったのでしょうか。1945年8月9日、ソ連は日ソ中立条約に違反して対日参戦しました。8月15日、日本はポツダム宣言を受諾しました。その後ソ連は北方領土を占領していきまし。つまり、もともと北方領土は日本の領土だったということ。す。

しかし、私たちは普段の生活の中で北方領土について考えることは少ないと思います。これは、時間がたつにつれて北方領土に対する意識が薄れてきているからではないかと思。現在も返還運動は行われています。また北方領土の日を定め、毎年その時期に記念行事が行われています。それにもかかわらず、占領されてから返還されな。いま今に至っています。たぶんほとんどの人は具体的にどのような運動が行われているのかなどは知らないと思。私自身、北方領土の日というものが

あるということ。インターネットで調べて初めて知りまし。だからもっと多くの。人に北方領土について知ってもら。べきだと思。す。

北方領土ではこのような事件も起きています。2006年8月16日、根室のカニかご漁船第三一吉進丸が北方領土海域でロシア国境警備隊に拿捕され、乗組員一人が射殺され、船体が押収されるという事件が起。りました。ロシアの警備艇による日本船銃撃事件は、この事件の他にも多く起。きている。そうです。

尊い国民の命が北方領土問題が原因で奪。われたのです。私は、北方領土問題は政府が解決しなければなら。ない問題であり、罪もない国民の命が奪。われるのはおかしいと思。います。今後この。ようなことが起。こらないようにしてほ。しいと思。います。

北方領土の問題が、日本とロシアの外交問題に影。響したり、日本人とロシア人が持。つお互いのイ。メージを悪。くしたりするのはどちらも望。んでは。いないと思。うので、できる。だけ早い解決が求。められると思。います。

佳作

北方領土と僕たち

舞鶴市立青葉中学校
三年 久保 賢太郎

この作文を書くにあたり、まず自分が北方領土について何も知らないと言うことに気がつきました。北方領土とは、歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島の四島からなる地域をそう呼んでいることと、今はロシアによって占領されていることは知っていましたが、それ以外は何も知りませんでした。

歴史的なことは後ほど述べることにして、なぜ今、中高生の僕たちが、この問題と向き合わなければならぬのか考えてみました。まず北方領土について調べ、その後考えた結果、出た答えは、「北方領土が日本の領土として認められていないことにより、悲しい思いをしている人たちがいるという現実を、同じ日本人として他人事のように思っているといけない。」ということでした。北方領土とは無関係な地域で生活している僕たちは、電車に乗れば、バスに乗れば行けない場所なんて今までありませんでした。しかし、島から追い出された元島民の方たちは、毎日、目で見ることができる距離にある自分の故郷に帰ることすら限られているなんて、どうしても理解できませんでした。

では、なぜ北方領土がロシアに返還を求めなければならぬ状況になってしまったのかというと、戦後に結んだサンフランシスコ平和条約の中で、日本は千島列島を

放棄しました。しかし放棄した千島列島の中に、北方領土は含まれておらず、北方領土は間違いなく日本の領土です。その後、国交回復のために日ソ共同宣言が署名され、北方領土問題について何度も交渉が続いているにもかかわらず、進展がない現実には、自分が生まれ育った土地を思う人々にとつて、どれだけの悲しみや苦しみを与えてしまっているのだろうと思います。

そして、この問題が政治や新聞の中で大きく取り上げられない今、自分に何ができるのかを考えました。それはこの北方領土問題を風化させてはいけないこと、僕たちの世代が少しでも関心を持つことです。昔はテレビCMでも北方領土のことが流れていたし、ポスターもたくさん目にしたと聞いています。今それはありませんが、日本の国に住む人全員が、この問題を知らなければならぬ時期と時代がきていると思います。

政治家でない僕たちは、直接問題に関わっていくことはできません。しかし一人でも多くの人々が明確な自分の意志や意見を持つことはしなければならぬし、そうすることで必ず解決に向かう問題だと思えます。だからそのことを忘れずに、これから北方領土問題について学び、意見を持つていこうと思います。

佳作

北方領土問題

南丹市立八木中学校
二年 中村 康太郎

「北方領土問題」。北海道の根室沖からオホーツク海と太平洋の間に連なる択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島の領有権をめぐる問題である。四島の総面積は5036平方キロメートル。これら北方四島は、1945年の日本敗戦時にソ連に占領され、それまで島に住んでいた約17000人の日本人を強制退去させたことが事の発端である。そして現在、元島民の多くが国境の町根室に住み、15000人近いロシア人が四島に住んでいる。日本政府はこれを不法占拠として島の返還を要求し続けているが、ロシアは自国領と見なし、これを拒否して今日に至る。

僕は、北方領土問題について、これまでテレビのニュースや教科書で見たり聞いたりしたことはあるが、深く知ろうとしたり考えたりしたことはなかった。ただ、カニ密漁のことや、日本船が領海を越えたと行って拿捕されてしまい、乗組員の家族が心配している画面をテレビで見て、生活のために危険区域で漁業をしているのだから、ロシアは怖い国、不信任が募る国だなあと思っていた。

そこで「北方領土ってどんな島なのか」「国際的な決まりはどうなっているのか」「交流と今後どうなっていくのか」などについて調べてみることにした。

北方領土にはたくさん動物たちが住んでいる。キタエゾライチョウ、オジロワシなどの珍しい鳥も多い。

また、北方領土の周辺は、世界三大漁場の一つに数えられている。特にサケ、サンマ、タラバガニ、ハナサキガニなどの宝庫である。冬は北海道内陸部より温かく雪も少ない。夏は海霧がかかり日照時間が短くオホーツク海から冷たい空気が入ってくるので涼しい。このように北方四島は豊かな自然に満ち、漁場としても最適で実に魅力的である。

歴史を振り返ると、17世紀の初めに日本は島々のことを知り、18世紀後半には勇敢な日本人が詳しく調査した。1799年に高田屋嘉兵衛が苦心の末、国後島、択捉島の間に航路を開いた。またアイヌの人も苦勞しながら島を開拓して住んでいた。このように北方領土は古来から日本の領土なのである。

1981年、政府は2月7日を「北方領土の日」と定め、1992年から、日本住民と北方四島在住のロシア人との交流の拡大と日本人による四島へのパスポート、ビザなしの訪問が始まった。これからもお互いにメリツトを見いだしながら発展できるような手があると思うので、交流を積み重ねて信頼関係を築いていってほしいと思う。

領土問題の解決には、これまでの歴史が示すようにまだまだ多くの努力と時間が必要である。だからこそ、両国民一人一人が北方領土についての歴史や現状を理解し合い、認識を深めることが大切だと思う。

僕は、北方領土問題を解決して平和条約を結び、日本とロシアとの間の本当に安定した友好関係を築くことができるようにと強く願う。四島が返還されたら、日本とロシアの友好の架け橋にして、お互いの国がもっと仲よくしていくべきである。四島が返還されたら、珍しい動物や鳥類を見にぜひ四島を訪問したい。

発 行

平成21年（2009年）2月7日

北方領土返還要求京都府民会議

〒601-8325 京都市南区吉祥院八反田町1-1番地5
（株）旭洋内

京都府北方領土教育者会議

〒622-0041 京都府南丹市園部町小山東町藤ノ木2-1
京都府南丹教育局内